

聖書：マタイ 18：21～35

説教題：兄弟を心から赦す

日時：2019年12月15日（朝拝）

今日の箇所は「一万タラントを赦されたしもべのたとえ」として有名な箇所です。おそらく聖書を見なくても、その内容をスラスラ言える方も多いのではないのでしょうか。しかしどの御言葉も文脈の中で読むことが大切です。そうする時、よく知っていたと思っていた御言葉も、実は自分が思っていたのとは違うニュアンスで語られていたということを見出す場合があります。この箇所ももしかするとそうであるかもしれません。この18章は「天の御国では、いったいだれが一番偉いのですか」という弟子たちの問いから始まって、イエス様は3節で「向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国に入れません」と言われました。自分は偉いとふんぞり返るような人は天の御国に入れない。天の御国にはそんな人は一人もいない。取るに足りない自分であることを認めて、へりくだってただ神の恵みにより頼む人。その人だけが天国に入る。そしてその人は自分と同じように小さい人、この世で見下されている人を大事にします。その小さな者をつまずかせてはならないと言われました。そんな者は大きな石臼を首にかけられて海の深みに沈められるほうが良いとも言われました。そして天の父なる神は迷い出た一匹の羊をいかに大切に追い求める方が語られました。99匹もいるから、どこかにさまよい出た一匹なんかどうでも良いとは言わず、99匹をそこに残しても一匹を探しに出かける。こういう話の流れの中で15節以降のいわゆる教会訓練の話も語られました。私たちはもしかすると、教会の中で罪を犯した人をどのように教会として処罰するかというさばきの話としてその箇所を読むかもしれませんが、先週と先々週に見ました通り、これは罪を犯した人の回復を図る方法です。神の道から迷い出て、そのままでは滅びに至りかねない兄弟姉妹をどのようにして父なる神と同じ思いで取り戻すように努めるのか、その手順が語られているところです。そのために二人でも三人でも心一つにして祈って取り組むように！と主は語られました。こうした流れの中で今日の21節以降の御言葉があります。

さてここでペテロがイエス様にこのように問います。21節：「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何回赦すべきでしょうか。七回まででしょうか。」まずここに「私に対して罪を犯した場合」とあります。教会の中である兄弟が罪を犯したという状況と、その罪が私に対してなされたという状況とでは、話がだいぶ変わります。すでに15節

でその状況が考えられていた可能性もなくはありませんが、決定的なことは言えないことを前に申しあげました。いずれにしても私に対する罪の場合、私が直接の当事者となります。私が被害者になっています。その場合、どうしたら良いのか。ここでまず押さえておきたいのは、今日の話は広く一般に当てはめられる話ではありますが、文脈上、特に考えられているのは教会内における兄弟姉妹の交わりであるということです。もしかすると私たちは教会外の人に対しては、まだイエス様を知らないからとその罪を大目に見る心を持っていても、教会内の兄弟姉妹に対してはそうでないかもしれません。イエス様を信じるクリスチャンであるのに、この言動は何事か！と一層怒り心頭となるかもしれません。しかし今日の箇所は、特にこの後者の状況を想定して語られていることを心に留めておきたいと思います。

ペテロはこれまでのイエス様の話を聞いて、その基本メッセージを理解したようです。彼は「何回赦すべきでしょうか。七回まででしょうか。」と問います。当時のラビたちは3回までは赦すべきと教えていました。日本にも「仏の顔も三度」ということわざがあります。ある回数までは慈悲深い顔で接しても、限度を超えたらもう赦さない。柔和な顔はやめて次は鬼になるということです。それに対してペテロは「7回まででしょうか」と言います。もし私たちが兄弟姉妹の繰り返し犯す罪を7回も耐え忍んだら、私たちの交わりは何と大きく変わることでしょう。ところがイエス様は22節で「わたしは七回までとは言いません。七回を七十倍するまでです。」と言われました。これはもちろん491回になったら赦さくて良いということではなく、無限に赦すということです。ある回数を超えたらもう赦さないと指折り数えて待つ態度ではなく、限りなく赦す姿勢で、私に罪を犯す兄弟姉妹に関わるべきことを教えるものです。

たとえ話の内容は分かりやすいものです。ある家来に一万タラントの負債があつて、清算のために王の前に連れて来られます。24節の「タラント」という言葉には印がついていて、欄外の24に「1タラントは6000デナリに相当。1デナリは当時の一日分の労賃に相当」と注釈されています。計算しやすいように今日の一日の労賃を一万円とすると、1デナリは一万円、1タラントはその6000倍ですから6000万円、1万タラントはその1万倍の6000億円となります。もし自分がこの6000億円という借金を背負っていたらどうでしょう。これは16万年以上の労賃に相当します。これでは返済は無理です。この家来は25節で「自分自身も妻子も、持っている物もすべて売って返済するように」と命じられましたが、そのようにしてすべてを投げ出しても返済することは不可能です。

これは神の前における私たちの姿を現わしているものです。私たちは神に対して返し切れない負債を負っている者です。神が私たちに命じている道徳的律法に毎日、あらゆる瞬間に違反し、もはやどのようにしても、さばかれる運命から自分を救い出せない絶望的状况にある者たちです。しかし神はそんな私たちを憐れんでくださいました。27 節の「かわいそうに思って」という言葉は、あの有名な「腸がよじれるような」という意味を持つ言葉です。神は靈的破綻者である私たちを深く憐れみ、何と負債を全額免除してくださいました。損失はすべてご自身の側で一方的に引き受けて、私たちをこの束縛から解放してくださったのです。

しかしこのたとえ話の大切な点はその後です。この家来は 28 節で出て行くと、自分に 100 デナリの借りがある仲間の一人に出会います。その時、彼はどうしたか。彼はその人を捕まえて首を絞め、「借金を返せ」と言います。彼の仲間がひれ伏して「もう少し待ってください。そうすればお返しします。」と嘆願します。この言葉は 26 節でこの家来が王に嘆願した言葉とほぼ同じです。ところが彼は仲間の嘆願を承知せず、その人を引いて行って負債を返すまで牢に投げ入れました。彼が貸していたのは 100 デナリです。これは 100 日分の労賃に相当します。先ほどの計算で言えば約 100 万円です。3~4 ヶ月分の給料に相当しますから確かに大きい額でしょう。しかしだからと言ってこういう態度を取ることは許されるのでしょうか。彼はたった今、王から 6000 億円も赦されるという信じがたい恵みにあずかりました。その人は普通に考えれば大きな喜びに満たされて、それと比べたらわずかでしかない 100 万円貸しのある人にも同じように寛大に接してあげるべきではないでしょうか。私たちは誰かに良くしてもらおうと嬉しくなって他の人にもそうするものです。心が広がって、感謝と喜びに包まれて、自分がそうしてもらったように他の人にもそうしてあげよう！という気持ちに導かれるものです。ところがこの家来はそうしないことによって、王がしてくださったことに少しも心を動かされていないことを現わしたのです。主君が自分にしてくださった恵みを何とも思わず、それを非常に軽く考えていることを示したのです。

そこで主君は家来を呼びつけます。32~34 節：「そこで主君は彼を呼びつけて言った。『悪い家来だ。おまえが私に懇願したから、私はおまえの負債をすべて免除してやったのだ。私がおまえをあわれんでやったように、おまえも自分の仲間をあわれんでやるべきではなかったのか。』 こうして、主君は怒って、負債をすべて返すまで彼を獄吏たちに引き渡した。」 ある人はここを読んで、王は一回家来を赦したのに、それを撤回

するなんてことはできるのかと問うかもしれません。しかし家来がそのような態度を取ったことは、王のしたことを何とも思っていないし、本当の意味でそれを受け取っていないというものの現れです。そのような家来をそのままにしておくことが良い王ではありません。イエス様は最後 35 節で「あなたがたもそれぞれ自分の兄弟を心から赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに、このようになさるのです。」と言っています。注目すべきは自分の兄弟を「心から」赦さないなら、と言われていたことです。表面的に、あるいはつぶやきながら、であってはならない。それでは神は良しとはされない。私たちは自分に罪を犯した兄弟姉妹を「心から赦す」あり方で関わっているのでしょうか。

このように歩むためのカギは何でしょう。それは何と言っても自分がどれだけ多く神に赦されているのかということについての自覚と感謝ではないでしょうか。もし神から受けた赦しは少しだと考えているなら、私に多くの迷惑と損害を与えた誰かを私は赦せないと思うのは当然です。しかし私たちは計算できないような途方もない借金を赦された者たちです。今日の箇所には 1 万タラント、約 6000 億円とありましたが、自分の罪を知る者にとってはそれでもまだ足りない。その絶望的な負債を全額免除され、その支払い義務から解放していただいた自分です。であるなら、それと比べてわずかでしかない 100 デナリを貸していた仲間を赦さないという態度を取ることは許されない。そのように振る舞う資格は私たちにないはずで、兄弟を赦すかどうか選択の余地などないはずで、このことから言えることは、私が喜んで他の人を赦すことができるかどうかで、私が本当に神の赦しを頂いているかどうか計れるということです。もし私たちが兄弟姉妹の罪を赦せない！赦したくない！という気持ちに捕われているなら、私たちは神の赦しを本当には分かっていない。自分が一体どれくらい赦された者であるかをわきまえていないし、神の前に正しく感謝していないことになります。果たして私たちは神の赦しを受け取っている者でしょうか。その具体的な証拠が対人関係、兄弟姉妹との交わりにおいて現われているのでしょうか。

最後にもう一度まとめとしてマタイ 18 章の話の流れを振り返りたいと思います。1～14 節では、神がイエス様を信じる小さい者たちの一人を大事にして下さっていることが語られました。ですから私たちは自分勝手な目で周りの兄弟姉妹を見下したり、軽んじる態度を取ってつまづかせてはなりません。神は私と同様、他の小さな者たちをも大事な存在として慈しみ、養っておられるお方です。15～20 節の教会訓練も迷い出た一人を捜し求める神のお姿を映し出すものでした。罪を犯した人を厄介者と判断して教会から

はじき出すのではなく、神と同じ心でその人の回復のために仕える働きに参与するようにと私たちは招かれています。そして今日の 21 節以降で、自分に対して罪を犯した人を限りなく赦すべきことが語られました。その基礎は神がまず私たちの途方もない負債を全額免除してくださったということ。この神が私にしてくださったことを心から感謝する天国の民は、この神への賛美と喜びをもって、この父なる神を映し出すような生活をする者でなくてはなりません。特に同じ仲間、兄弟姉妹に対してこのように関わり、共に歩むのが主の教会の交わりであるということが言われているのです。

私たちは今、クリスマス覚えてこの月を過ごしています。神は私たちをあわれんで途方もない罪を赦してくださいましたが、それはただではないことがこのことに示されています。もし「赦す」という宣言で済むなら、このクリスマスは必要ではありませんでした。しかし神は私たちの罪の解決のために、その代価を支払うために、ご自身にとって最も大切な愛する一人子に世に遣わしてくださいました。その方は貧しい飼料おけの中に誕生し、最後は十字架上で神の御子としての無限の価値を持ついのちを、大きな叫び声と涙と祈りをもって私たちの代わりにささげてくださいました。この尊い身代わりの犠牲によってすべての罪を赦され、さばきを免れ、永遠のいのちと天の御国に生きる祝福をいただいた私たちです。この神がしてくださったことを良く思い巡らし、感謝するなら、私たちが兄弟姉妹に対して取るべき応答は一つしかないはずです。それは今日の説教題でもある「兄弟を心から赦す」ということです。生まれながらの私たちには「人を赦す」ということはほとんど難しいことですが、神はイエス様の十字架の恵みを通して、それができる者へと私たちを導いてくださいます。この兄弟姉妹を心から赦すという具体的な歩みを通して、自分は本当に神の赦しを受けているということ喜びをもって確認し、御名を賛美する者でありたいと思います。そして神ご自身のご性質から出ているこの神の国の素晴らしさを、私たちが互いに忍び合い、赦し合い、愛し合う歩みを通して現し、さらにこの御国が広げられるために仕える者とさせていただきたいと思います。